

夏目漱石と徳永^{ろうし}隴枝

福岡女学院大学名誉教授(日本近代文学) 原 武 哲

1. 「淋しくば鳴子をならし聞かせうか」

徳永隴枝の名は岩波書店『漱石全集』第17巻「俳句・詩歌」(1996年1月12日)の[子規へ送りたる句稿 27 20句]に、

隴枝来る

淋しくば鳴子をならし聞かせうか

とあるのみである。この句稿は1897(明治30)年12月12日付正岡子規(常規・^{のぼる}升)宛漱石書簡に同封されたもので、「俳句少々御目にかけて候 序を以て御批正願上候」と添書され、熊本県飽託郡大江村から差し出されている。吉田精一・荒正人・北山正迪監修『図説 漱石大観』(角川書店)には、モノクロ図版で掲載され、子規筆の「規妄評」が読み取れ、20句中、二重丸が4句、一重丸が1句付けてあるが、前記「淋しくば」の句には何も評はない。また、『図説 漱石大観』には、

隴枝君に訪はれて

淋しくば鳴子をならし聞かせうか

という短冊(令孫・徳永龍氏所蔵)も収録されている。

いずれにしても徳永隴枝の名はこの句稿と短冊のみ伝わって、「漱石日記」にもその名は見えず、隴枝宛の書簡は「書簡」にも収録されていなかった。

この度、徳永隴枝(本名・^{うましち}右馬七)にあてた漱石書簡が確認され、調査する機会を得たので、漱石と隴枝との交渉を報告したい。

2. 徳永右馬七(隴枝)

¹ 徳永家は初代圓右衛門(1718〈享保3〉年～1790〈寛政2〉年)が1753(宝暦3)年に分家独立し、以後肥後国玉名郡石貫で代々庄屋を勤めた家である。徳永隴枝は本名を右馬七といい、5代目に当り、1870(明治3)年11月7日、父・広平、母・トシ(堤氏)の長男として熊本県玉名郡石貫村(現・玉名市石貫)に生まれた。当時、父の広平は玉名郡内田郷石貫組与長であった。

右馬七は1878(明治11)年1月、数え年9歳で玉名郡第7大区7小区第54番小学校の下等小学第8級に入学した。1880(明治13)年10月、第13番中学区石貫小学校の下等小学第1級を卒業した。1881(明治14)年4月10日、熊本県公立玉名小学校の上等小学第6級を卒業し、同年同月14日、公立玉名中学校予科入校を許された。1883(明治16)年11月1日、熊本県立熊本中学校に転学、1887年10月31日、熊本県尋常中学科第5年級修業中退学し、同年11月14日、新設で10日に開校したばかりの第五高等中学校(後の第五高等学校、現・熊本大学)予科3級に仮入学した。この時、同じく予科3級に入学した者に、右馬七生涯の友となった武藤虎太(第9代第五高等学校長)、赤星典太(熊本・山口・長野・長崎県知事)、小橋一太(文部大臣)がいる。しかし、右馬七は学業が思うほど伸びず卒業が遅れるので、「² 家事困難之為メ」1892(明治25)年4月24日、予科第1級乙組の時、退学した。

第五高等中学校校友会機関誌『龍南会雑誌』第7号(1892年5月20日出版 武藤虎太編集)には、

武藤彪(虎太)が「文苑」欄に徳永右馬七送別の漢詩を寄せている。

送徳永生之京

花開乍將落 月満亦還虧
雨至春時口 人於別夜悲
一生壯子夢 百載少陵詩
匹馬明朝去 與君黒水期

また巻末の「雑報」欄に「徳永右馬七氏 同氏は去日本校を退学し 直に上京の途に向かへり、文科大学選科に入るの志願なり」と報じている。しかし、徳永右馬七は帝国大学文科大学(後の文学部)の選科(旧制高等学校を卒業して入学するのが正科生であるが、高校中退や私学専門学校卒業者など傍系の者で1科目または数科目を選んで専修しようとする者を受け入れた特別課程)には入らず、1892(明治25)年11月10日、東京専門学校(1902年に早稲田大学となる)文学科2年級に入学した。1894年7月20日、右馬七は数え年25歳で東京専門学校文学全科を卒業した。第2回卒業生は総計35名であった(中島半次郎「学生時代」『早稲田大学』第157号、1918(大正7)年12月号)。卒業証書は次の通り記されている。

徳永右馬七

右本校文学全科ヲ修メ考試登第ス仍テ其得業ヲ証ス

講師 米国文学博士	*3 家永豊吉 印	講師 理学士	*4 磯野徳三郎 印
講師	*5 畠山 健 印	講師 文学士	*6 大西 祝 印
講師 文学士	*7 立花銑三郎 印	講師 文学士	*8 坪内雄蔵 印
講師 文学士	*9 小屋保治 印	講師	齋藤 木 印
講師	*10 三島 毅 印	講師	*11 信夫 粲 印
講師	森 泰二郎 印	講師	*12 関根正直 印
講師 Arthur Leoyd M.A.		講師 Frederick J. Stanley M. A.; litr. D.	

東京専門学校長 鳩山和夫 校長印

学校印 明治廿七年七月二十日

1894(明治27)年9月、第五高等中学校は第五高等学校と改称された。右馬七は1895年4月11日、母校の第五高等学校英語科の嘱託教員となり、報酬として1ヶ月20円を受けることとなった。初めから前任者(おそらく95年3月31日に辞任した英語講師隈部富良であろう)の残り任期(年度末の8月31日まで)だけの5ヶ月の期限付採用であった。同年8月31日、契約通り願により嘱託を解かれた。同日、夏目漱石の心友である論理学、ドイツ語の^{*13}菅虎雄(最初は講師として着任、同年10月3日教授)、漱石とも親しかった歴史の長谷川貞一郎(最初講師、同年10月29日教授)、右馬七の同級武藤虎太(最初講師、同年10月29日教授)の3人が着任している。後に右馬七(臙枝)が親しくなる夏目金之助(漱石)の着任は翌年の1896年4月のことである。

1896(明治29)年2月5日、右馬七は伊倉村の岡本新太郎妹タズと婚姻、入籍したが、

1898年4月24日、生後2ヶ月の長男鉄郎を遺して亡くなり、鉄郎も2ヶ月後母の後を追って夭折した。1896年2月13日、右馬七は熊本県尋常中学済々黌の助教諭心得となり、月報18円を支給された。月給20円の五高嘱託教員にくらべると、グレイド下位の月給18円の尋常中学教諭心得はいかにも格下げされたという感がする。開明的な自由民権派の改進黨が支援する熊本県立熊本中学校で学んだ右馬七が、保守的な国家主義的学風の済々黌でどのような気持ちをもって教育したであろうか。「¹⁴温厚な」教師であった右馬七は、いかなる理由であろうか、就任3年余りにして、1899(明治32)年3月31日で依願退職した。

1ヶ月後の同年5月5日、右馬七は佐賀県第三中学校(後の県立唐津中学校、現・佐賀県立唐津東高等学校)の教諭心得を命ぜられ、月俸30円を給与された。どうして故郷の熊本を去り、知らぬ佐賀に落ちて行ったか、今はわからない。国権党の流れを汲む国家主義的な済々黌に嫌気がさしたのか、それとも、助教諭心得から教諭心得に昇格し、月俸20円から30円に増俸することを望んだのであろうか。

1899年5月10日、右馬七はここ唐津で故郷玉名から今村タズを妻として迎え入れたが、2年後、何らかの事情があったのであろう、1901年6月10日付で協議離婚した。唐津の第三中学校では職務格別勲励に付き、2度にわたって賞金を給与されたにもかかわらず、1901年1月11日の年度途中で突然病を得て、退任した。そして2度と教職に就くことはなかった。

タズと離婚して半年後、同年11月25日、右馬七は中村シシと結婚した。3回目の結婚に当る。最初の妻タズとの間に長女イツ、長男鉄郎が出生したが、2人とも半年もたらず夭折、2度目の妻タズとの間には子をなさなかった。3度目の妻シシとの間には2男維一郎、2女関、3女郁、3男春夫の2男2女を得たが、維一郎が1956年7月に53歳で没した外、3人は健在で、長寿を保っている(1994年1月現在)。

1903年4月2日、父広平は隠居し、右馬七は数え年34歳で家督を相続、戸主となった。隠居となった広平は和歌の道の風流三昧に入り、右馬七も見習って、美質と号し、和歌を詠ずることとなった。

1909(明治42)年8月18日、右馬七が40歳の時、熊本県玉名郡石貫村名誉職村長に就任した。名誉職とは村長として給与の支給を受けないということであり、生活に支障を来さない地主階級がこれに当たった。1913(大正2)年8月21日、石貫村村長に再選、重任したが、何の理由か任期途中の1915(大正4)年1月31日辞職した。その間、購買組合の育成、小岱官山の民間払い下げ、1914～5(大正3、4)年事件(日独戦争、第一次世界大戦)の協力など村政革新の施策を着々と実行し、実績を挙げた。

2年間の空白の後、1917年8月10日、再び玉名郡石貫村名誉村長に当選、2回目の就任となった。1919年11月21日、石貫村村長を辞任したが、1920年2月26日、石貫村名誉職村長に就任した。1924年4月21日、石貫村村長に再選重任、1928(昭和3)年1月31日辞職した。右馬七は1924年ころから玉名郡出身の大塚唯男(政友本党)を擁立し、後援は生涯続いている。大塚は1924年の第15回総選挙から、戦後公職追放となった第22回～24回を除き、1955年2月の第27回まで1度も落選することなく、連続当選した。1934年より民政党幹事長を3期勤め、1943年東条内閣の無任所大臣、戦後は鳩山内閣の国務大臣を2期勤めた。

右馬七は1928年1月村長辞職後、大塚後援の政党活動と玉名郡農会長など産業組合の

育成充実に奔走した。そして、1935年2月12日、3回目の石貫村長に就任した。時に66歳であった。1939年2月25日、村長に再選重任し、1940年10月、石貫村長を辞任、村長職を2男維一郎に譲った。維一郎は太平洋戦争の困難な時期に村長職を勤め、敗戦後の混乱を乗り切り、1946年2月28日の公職追放令により、失職した。

右馬七は村長辞職後、広福寺蔵菊池文書の国宝指定、修理、宝物庫建設、徳富蘇峰詩碑建立に余生を捧げた。1944年1月25日、肺炎のため死歿。享年75。玉名市石貫向山の徳永家墓地に葬られる。以上は徳永春夫氏著『肥後国玉名郡石貫村 徳永家の歴史』（私家版、1992年12月）による。

3. 漱石と徳永右馬七との出会い

徳永右馬七が初めて夏目金之助(漱石)と出会ったのは、おそらく東京専門学校在学中、2年級に編入学した1892(明治25)年11月10日から卒業した94年7月20日までの約2年間であろう。

帝国大学文科大学英文科2年在学中の夏目漱石は1892年5月6日、東京専門学校講師で、文科の陣容を整える任に当たっていた大西 祝(操山)に小屋保治(当時帝国大学文科大学大学院在学中。後に大塚楠緒子と結婚、大塚家に入婿。東京帝国大学文科大学教授、美学)と共に推薦されて、東京専門学校講師となった。週に2回、*¹⁵ 先任教师から引き継いで、*¹⁶ John Milton の "Areopagitica" (1644年)を苦心して教えたり、Oliver Goldsmith の *¹⁷ "The Vicar of Wakefield" などを教えた。当時文学科学生は3年(第1期生)に*¹⁸ 水谷弓彦(不倒)、*¹⁹ 池谷(永井)一孝、*²⁰ 土肥庸元(春曙)、*²¹ 金子馬治(筑水)、*²² 紀淑雄、*²³ 中桐確太郎があり、2年(第2期生)に*²⁴ 後藤寅之助(宙外)、*²⁵ 中島半次郎、*²⁶ 島村滝太郎(抱月)、*²⁷ 藤野潔(古白)があり、1年(第3期生)に*²⁸ 五十嵐 力、*²⁹ 綱島栄一郎(梁 川)、*³⁰ 朝河貫一などが名を連ねていた。徳永右馬七は1892年1月10日に2年に編入学し、後藤中外や島村抱月らと同級になり、夏目漱石から英語を習ったのではないかと思われる。

漱石は東京専門学校講師当時の1892年12月、漱石辞職勧告の運動が正岡子規から伝えられ、意外の感に打たれ、憤慨、衝撃を受ける。この漱石の授業不評、辞職要求の動きを報告した子規の漱石宛書簡は講談社版『子規全集』第18巻「書簡1」にもなく、未発見であるが、12月14日付(15日消印)の子規宛漱石書簡(写真版は『夏目漱石遺墨集』第5巻「書簡集」求竜堂)では、

偕運動一件御書状にて始めて承知仕り少しく驚き申候 然し学校よりは未だ何等の沙汰も無之 辞職勧告書杯も未だ到着不仕 御報に接する迄は頓とそんな処に御気がつかれず平氣の平左に御座候 過日学校使用のランプの蓋に「文集はサッパリ分らず」と書たるものあれど是は例の悪口 かゝることを気にしては一日も教師は務まらぬ訳と打捨をき候 其後講義の切れ目にて時間の鳴らぬ前無断に室外に飛び出候生徒ありし故、次の時間に大に譴責致候 是は前の金曜の事其外別段異常も無之今日迄打過居候 元来小生受持時間は二時間のところ生徒の望みにて三時間と致し 且つ先日学年受持の生徒来り同級へも出席致し呉ずやと頼み候位故左程評判の悪しき方ではないと自惚仕居候処豈計らんやの訳で大兄の御手紙にて運動一件小生の耳朶に触れ申し候 勿論小生は教方下手の方なる上過半の生徒は

力に余る書物を捏ね返す次第なれば不満足の生徒は沢山あらんと其辺は疾くより承知なれど是は一方より見ればあながち小生の咎にもあらず学校の制度なれば是非なしと勘弁仕居候 去るにても小生の為めに此間運動杯致す程とは実に思ひも寄らずと存居候段随分御目出度かりし 無論生徒が生徒なれば辞職勧告を受てもあながち小生の名誉に関するとは思はねど学校の委託を受けながら生徒を満足せしめ能はずと有ては責任の上又良心の上より云ふも心よからずと存候間此際断然と出講を断はる決心に御座候

(炬燵から追い出れたる)は御免蒙りたし

病む人の炬燵離れて雪見かな

とあり、追伸として、

御報知の段ありがたく奉謝候 坪内へは郵便にて委細申し遣はすべく候 其文言中には証人として君の名を借る 親友の一言なれば固より確實と見認むると云へば突然辞職しても軽率の誹りを免が[る]ゝ訳なればなり 願くば証人として名前(ママ)文をかし給へ 但し出処は命ぜず召還の氣使ひも無用なり

と書き添え、不評の情報の信憑性について、多少疑問を持ち、ランプの蓋に「文集はサッパリ分らず」と落書されたり、講義の終る前に室外に飛び出した生徒を譴責したりしたことはあったが、生徒の希望で受持時間の2時間を3時間にしたり、前学年受持の生徒が漱石のクラス出席を希望したりしたので、評判は悪くないと自惚れていたほどだったという。

しかし、学校の委託を受けながら生徒を満足させることができないとあっては、責任上、良心上から言っても心よくなく、この際出講を断る決心をした。 ついては文学科長の坪内逍遙に委細を問い合わせ、証人として子規の名を借りることの了解を得たいと書いた。「親友の一言なれば固より確實と見認むると云へば突然辞職しても軽率の誹りを免が[る]ゝ訳なればなり」ということばには子規に対する屈折した心情が見られ、皮肉な感情が察せられる。 正岡子規に漱石の授業評判を伝えた者が誰であるか、今はわからないが、漱石・子規共通の知人という藤野潔(古白)が第2期生にいたが、彼が通報者である証拠は何もない。

漱石は果して坪内逍遙に辞職願を出したかどうかはわからない。 ただ、12月17日、おそらく、東京専門学校不評の件であろう、漱石は下谷区上根岸町88番地の子規宅を訪れている。

12月17日 漱石来 君にとてくはすものなし冬ふゆごもり 篋

(正岡子規「獺祭書屋日記」)

この日、2人はこの件について話し合い、深刻な問題に発展する気遣いのないことを確認したのであろう。 以後、東京専門学校の授業についての問題が2人の話題になったことはない。

翌1893年7月10日、夏目漱石は帝国大学文科大学英文学科を卒業したが、同時に卒業

した史学科の^{*31} 齋藤^{あぐ}阿具を東京専門学校に出講するように世話しているので、坪内逍遙との関係は悪くないし、1895年3月、漱石は松山の愛媛尋常中学校に赴任するまで東京専門学校講師を続けている。従って授業の評判は決して悪くなかったし、「^{*32} 綱島梁川日記」は漱石の躍如たる授業ぶりを伝えている。このような中で、徳永右馬七も漱石の授業を受けたのではあるまいか。

ただ、前述のように、徳永右馬七の東京専門学校卒業証書に記載された14名の講師陣の氏名の中に夏目金之助の名はない。帝国大学在学中から出講し、1893年7月に帝国大学を卒業しているので、1894年7月には「講師 文学士」の肩書を持っていたはずであるが、なぜか記載はない。形式的で煩雑な事務を嫌ってわざと署名捺印しなかったのであろうか。

4. 熊本における右馬七

徳永右馬七は1894(明治27)年7月、東京専門学校文学科を卒業後、故郷の熊本県玉名郡石貫村に帰り、1895年4月から8月まで母校の第五高等学校英語科嘱託教員となった。

一方、夏目金之助(漱石)は1896年4月13日、第五高等学校講師として熊本に赴任して来た。その時、右馬七は同年2月から熊本県尋常中学済々黌助教諭心得として熊本にいた。2人はここ熊本で再会したのである。

再会した漱石と右馬七の話題は早稲田時代のこと、俳句のこと、英語のことだったろう。

臙枝というのは徳永右馬七の俳号であるが、おそらく帰郷後、漱石と交流しているところに命名したのであろう。俳号の由来については山崎貞士氏は後述のように芭蕉の句との関連を推測している。

石貫村の素封家であった右馬七の父広平は和歌に堪能な風雅の人で、「広比羅」と号し、愛好の同志と歌会を催し、添削批評して秀歌を天地人と位付けして賞していた。歌会の詠草は今も「徳永文書」に保存されている。1868(明治元)年8月17日から広平は大坂御屋敷(細川藩邸)警衛のため派遣され、67年2月には京都市中の警備に当り、同年10月19日肥後に帰着した。その京都滞在中、近江八景の一、琵琶湖畔の唐崎に遊び、その松の実を拾って袖に入れ、石貫の庭に播いたのが芽生え、大樹となり、「袖づての松」と名付けられた。徳永家のシンボルとして枝を張り、庭園を掩い、繁っていたが、敗戦後松喰虫の害で枯れたという。

右馬七は明け暮れ、この松を仰ぎながら成長したが、芭蕉の『甲子吟行』(1685(貞享2)年)中の句、

湖水眺望 唐崎の松は花より臙にて

にヒントを得て、この句に因んで臙枝と号したと^{*33} 山崎貞士氏は推測している。なお、右馬七は和歌を作る時は、「^{*34} 美質」という雅号を用いた。

さて、『漱石全集』でただ1つ「臙枝」の名を残したのは、前述のごとく、1897(明治30)年12月の[子規へ送りたる句稿 27 20句]の、

臙枝来る 淋しくば鳴子をならし聞かせうか

であるが、漱石の「鳴子」を詠んだ句は4句遺っており、他の3句は、

引かで鳴る夜の鳴子の淋しさよ [子規へ送りたる句稿 17 40句] 1896年9月

鳴子引くは只退屈で困る故 [子規へ送りたる句稿 26 39句] 1897年10月

鳥も飛ばず二百十日の鳴子かな [子規へ送る句稿 34 51 句] 1899 年 9 月であり、いずれも熊本在住当時の作である。折角苦勞して育てた作物を鳥獣などに荒らされないように田畑の要所に立てた竹を柱にして、網や縄を張り、細い竹の管などをぶら下げた板切れをくくりつける。作物を荒らしに近づく鳥獣を、掛縄や綱を引いたり、風などを利用して鳴らして追い払うのである。田園の秋を象徴する風物の 1 つであるが、秋風に吹かれておのずと鳴る鳴子の音を聞くと、ひとしお秋の寂寥を感じ、「淋しさ」の心情と結びついて詠まれる。正岡子規の句にも、「淋しさにうつむいてひく鳴子哉」というのがある。

1897(明治 30)年秋、臈枝が訪れた漱石の家は、熊本県飽託郡大江村 401 番地(現・熊本市新屋敷 1 丁目 16 番地。1897 年 9 月 11 日～98 年 3 月居住)であるが、それ以前の合羽町 237 番地(現・熊本市坪井町 2 丁目 9 番 11 号。1896 年 9 月～97 年 9 月居住)のころから出入りしていただろう。

徳永右馬七が熊本県尋常中学済々黌に勤務したのは、1896 年 2 月 13 日から 99 年 3 月 31 日までの約 3 年間で、漱石が第五高等学校に赴任したのが、96 年 4 月 14 日である。漱石が熊本在任中に済々黌で英語を教えたという説がある。済々黌が出した『多士』創立 80 周年記念号に 1898(明治 31)年卒業生奥村政雄氏(日本カーバイト社長)の回想記として、

中学時代の思い出の 1 つは、夏目漱石先生から英語を習ったことである。当時五高の校長は弘道館柔道の嘉納治五郎さんであつたが、漱石は五高の少壮教授として迎えられ、済々黌の講師を兼ねていた。それまでのわれわれは、英語らしいものを習うには習つたが、漱石によつてはじめてほんとうの英語に接したような気がした。しかし夏目先生としては「こいつらに英語を教えてもわかるまい」という気持ちがあつたのか、英語そのものよりもシェークスピアやモンテクリスト伯、ジャンバルジャンの話などをしてくれた。われわれもそれが面白いので、「先生、なにか話をして下さい」と頼むと「さて何を話そうか」と、十分なり十五分はそういう話を聞くのが常であつた。いま思うに、夏目さんは熊本時代に俳句に磨きをかけられたのではないだろうか。熊本市内の北部は俳句の盛んなところで、夏目さんのお住まいの近所にも同好の士が、たくさん集まっていた。後年こういう人たちで、“坊っちゃん”や“吾輩は猫である”に登場した人物が少なくなかつたと思う。

(日本経済新聞社『私の履歴書』)

とある。漱石五高在任当時、五高校長が嘉納治五郎というのは誤りで、中川元^{はじめ}であつたが、もし漱石が済々黌で非常勤講師として英語を中学生に教えていたとするならば、済々黌で助教諭心得の徳永右馬七と非常勤講師の夏目金之助とが再会していたということになる。ここで 2 人の間に俳句を通じての交わりができたと考えられる。

ここに夏目家に保存されている子規宛句稿(1897 年春、角川書店『図説 漱石大観』166)がある。無為(菅虎雄、五高教授)、枕水(未詳)、臈枝(徳永右馬七)の句が記載され、正岡子規の評点(無為の句 11 句中、2 つ丸 2 句、1 つ丸 4 句)と添削(「春の水の浅き所を渡り行け」を「夏川にしてはいかげや」と、「石室や入定の僧梅の花」には「下五いかげ」と、「春の月扇ヶ谷の臈」には「春、臈重複」)評が加わっている。書体は 3 人の句とも同筆なので漱石の筆と思われ、3 人の句を漱石が書き写し、子規に自分の句と一緒に評点を依頼し、子規から漱石に返送されたものと推定される。

徳永隴枝の2句とも子規の点では1つ丸で、評は付いていない。

○女俱して月隴也須磨の水 隴枝
○水温む鶯口をぬらすべく 隴枝

第1句目の下五「須磨の水」は、『図説 漱石大観』の「図版解説」では、「須磨の秋」と読んでいるが、中七に「隴」があるので、春の句に「秋」では合わない。「水」と読むべきである。ついでに言うておくと、同じ166子規宛句稿の無為の句、「そもさんか箱根の関の春の月」の「関」を「図版解説」では「山」と読んでいるのは、誤りである。

この句稿は「無為」(菅虎雄)が1897年7月17日^{*35}上京(「狩野亭吉日記」)しているのも、それ以前の句である。また漱石自身も同年6月29日、兄直矩から実父直克死去の電報を受け、学年末試験のため、すぐには帰省できず、7月8日午前、妻鏡子を伴って上京した。

だから、166子規宛句稿は漱石の「子規へ送りたる句稿」と同封して子規に郵送されたとするならば、「23 40句」か「24 51句」が春の句が多いから、このいずれかと一緒に送った可能性が高い。

ところが、隴枝の句、

女俱して月隴也須磨の水

は、最初、

隴夜や女の宿の須磨泊り

であったのを、漱石が添削して、

女俱して月隴なり須磨の宿

と直したと^{*36}右馬七は伝えている。下五「須磨の宿」は子規に送られた時、さらに「須磨の水」に変わった。

山崎貞士氏の『漱石異聞』(5)によると、隴枝が漱石に俳句入門したのは、合羽町時代(1896年9月～97年9月)であったという。ある時、

空濠に落ち込む松の落葉かな 隴枝

の句を漱石に示したら、「どうもこの句はぼうっとして、全然印象が把握されていない。しかも余韻余情といったものがない。」と評されたら隴枝は後日語ったという。

隴枝の句を漱石が添削したものとして、山崎貞士氏は次の句も挙げている。

見上ぐれば崖千仞の紅葉かな 隴枝

を、

見上げたる崖千仞の紅葉かな 漱石添削

と改めた。「見上ぐれば」で休止する形を嫌って、一気に千仞にも及ぶ峭峻な嶮崖に紅葉する仰観を詠み込んだものと見える。また、

凧や小町の墓を吹きまはる 隴枝

を、

凧や小町の墓を吹いて鳴る 漱石添削

と直している。

徳永家に隴枝の短冊が遺っている。

山門を入れば銀杏の落葉哉 隴枝

隴枝の2男維一郎の^{*37}「夏目そう石と父(1)カベに明ける窓」(^{*38}『玉名民報』1955年8月18日。158号)によると、この「山門を」の句は隴枝が帰省して広福寺(石貫村。曹洞宗の名刹。「広

福寺文書」は中世菊池氏研究の基本史料) で得た句で、漱石宅に行った時、この句を見せると、

朧枝君に訪はれて

淋しくば鳴子をならし聞かせうか

の句を短冊に書いてくれたそうである。この短冊も徳永家に伝えられ、朧枝の「山門を」の句に対して漱石が「淋しくば」の句で応じたことを、朧枝は2男維一郎に伝えたものと見える。この言い伝えには2つの異説がある。

1つは1894年4月から1901年1月まで中学済々黌で国語漢文を教えていた³⁹安東真人(1863〈文久3〉年11月24日～1902〈明治35〉年5月28日。熊本県玉名郡長洲町1357番地。士族)が、1895年入学の済々黌の生徒だった岡崎鴻吉(元毎日新聞編集主幹)たち生徒に俳句の話をして自作の「山門を入れればいちょうの落葉かな」という句を示した(「漱石と熊本」岡崎鴻吉『熊本日々新聞』掲載年月日不詳。筆者未見)という⁴⁰荒木精之の記事がある。。これによれば、「山門を」の句の作者は安東真人ということになる。しかし、朧枝の署名のはいった短冊が現存する以上、やはり朧枝の作であろう。朧枝が済々黌に勤務していた1896年2月から99年3月までの3ヶ年間は、安東真人も同僚として済々黌に勤務していたので、岡崎が2人を混同してしまったのであろう。

もう1つは山崎貞士氏の『漱石異聞』によると、朧枝が久しぶりに大江村の漱石宅を訪れると、座敷に請じられ、床の間に草雲(玉名出身の時習館助教)の掛軸があったので、自宅に父祖伝来の墨蹟中に草雲書があったのを思い出した。同じ1897年の1月26日、長女イツが生後24日で歿した。

傷心の朧枝も、日頃の憂さを忘れて漱石と快談の末、1句をものした。

新しき畳にすわる寒さかな 朧枝

漱石は朧枝が愛児を亡くした心境を察したのか、

淋しくば鳴子をならし聞かせうか 漱石

と短冊にしたためた。

(「漱石異聞 一徳永朧枝との出逢ひ(4)一」山崎貞士『松』1991年10月)

山崎氏によると、「新しき」の句に依じて、愛嬢を亡くした悲嘆の心境を慮って、「淋しくば」の句ができたことになる。徳永春夫氏が「この年正月長女イツを亡くした淋しい心境を漱石が察してものしたといふのは測り過ぎであらう」と⁴¹書いているように、確かに死後半年以上たっているのに、徳永春夫氏の言われる通り、長女の死とは直接関係はなからう。

それにしても、漱石の「淋しくば」の句は、朧枝の「山門を」の句を受けたものか、それとも「新しき」の句を受けたものか。

5. 唐津における徳永右馬七と英語

徳永右馬七はどういう理由かわからないが、1899年3月31日、熊本県尋常中学済々黌を依願退職し、1ヶ月後の5月5日、佐賀県第三中学校(現・佐賀県立唐津東高等学校)の教諭心得となった。済々黌では助教諭心得だったので、昇格である。給与も済々黌では18円で採用され、1897年3月には20円支給されていた。佐賀三中では30円で採用され、1900年10月には35円に昇給している。やはり、済々黌の光風になじめなかったことと、収入を増やすために故郷肥後を離れ、肥前に落ちたものであろうか。

徳永右馬七が唐津の佐賀三中学校在任中に、熊本の五高在任中の夏目漱石に jet (黒玉石) という英語について尋ねたらしい。それに対して漱石が答えた書簡が熊本近代文学館に令孫徳永龍氏より寄託されている。岩波書店『漱石全集』第14巻「書簡集」(1966年12月24日)では未収録であったが、1996年3月19日発行の『漱石全集』第22巻「書簡 上」から収録された。

1899(明治32)年5月27日付であるから、唐津就任間もないころの書簡である。

(封筒表)

[消印] 肥後 熊本 32年5月28日 二便

佐賀県唐津水主町家野方 徳永右馬様^(ママ) 御返事

(封筒裏)

[消印] 肥前 唐津 32年5月29日 二便

熊本市内坪井町78

夏目金之助

五月二十八日

(本文)

貴墨拝誦 目下御地に御勤務のよし 山水明媚の勝地に候へば定めて御適意の事と存じ候 御尋ねの jet と申す字は black amber と意義より一転して単に黒色と申す義に使用致し候へば 此場合にも矢張り黒き色といふ名詞ならんかと愚考致候 指頭を黒く染めて居る即ち指爪の間^{など}杯に垢や何かがたまつてきたなくなつて居る処をば申したる迄かと存候 右は御報知迄 匆々頓首

五月二十七日

金之助

徳永様 坐右

右馬七は新しい任地唐津に到着し、その美観について漱石に書き送ったであろう。そして、新しい教科書の中の jet という未知の単語について漱石に質問したもののようである。この jet という単語が出る教科書または作品が何であるか、未だ典拠を明らかにし得ないでいる。1897(明治30)年ごろ、九州の中学校で使用されていた英語教科書としては、例えば、

(1)^{*42} 福岡県尋常中学修猷館

1年 (語学) スウキントン読本 巻1

(読章) 同 巻2

(習字) スペンセリアン習字帖

長谷川方丈撰「新編習字帖」

2年 (語学) スウキントン読本 巻2・3

(読章) チェーンバー歴史読本 巻1

3年 (語学) スウキントン読本 巻4

(読章) フランクリン自叙伝

4年 (語学) 口授

- プルターク「アレキサンダー伝」
- 5年 (語学) スウキントン大文典
 ゴールドスミス「エッセイズ・アンド・ポエムズ」

(2) 福岡県久留米尋常中学明善校

- 1年 (訳解) 斎藤秀三郎「英文読本」 初歩第1・2
 (習字) 長谷川方丈「新撰英習字本」 1・2・3・4
- 2年 (訳読) 斎藤秀三郎「英文読本」第2
 (会話) 文部省会話読本 第3
 (作文) 崎山元吉「英語教授書」 1・2
- 3年 (購読) 会話読本 第4・第5
 (文法) スウキントン「ニュー・ランゲージ・レッスン」第1・第2・第3・
 第4・第5
 (会話作文) 英語教授書 下巻
- 4年 (購読) プルターク「アレキサンダー大王伝」
 (文法) スウキントン「英文法」
- 5年 クリミヤン・ウォー

とある。福岡県尋常中学伝習館では前記以外の教科書としては、①第1年級＝舟橋確『新式英習字帖』 ②第2年級＝文部省『正則英語読本』 斎藤秀三郎『会話文典』 ③第4年級＝サンダー『ユニオン読本』などが使用され、その他の学校では『ナショナル読本』『ロングマン読本』『ウェブスター綴字書』などが使用されていた。

これらの教科書に jet という単語が出ているかどうかまだ調査していないし、1899(明治32)年度の佐賀県第三中学校の使用英語教科書についても未調査である。

この右馬七の質問に対して漱石は、jet という字は black amber という意味(黒琥珀色)と同じように使用されると答えている。右馬七の素朴な質問に対して懇切丁寧に答えていて好感が持てる。後進の英学徒に対する親近感がうかがえて好ましい。

その後、漱石・右馬七を結びつける接点はぷつりと切れている。徳永春夫氏は、「恐らくこれを最後にして漱石と右馬七の文通交際は途絶えたのではないかと述べている。ただ、夏目鏡子述、松岡讓筆録の『漱石の思ひ出』は早く買って書架に蔵していたそうだ。

第五高等学校生徒の俳句愛好者が夏目漱石を師として運座を開き、紫溟吟社と名付けていたが、徳永隴枝の名は、この連中の中にはない。隴枝がその他の俳句仲間に加わったり、俳誌の同人になったこともない。句集を編んだこともない。漱石と疎遠になってからは、俳句に親しむこともなくなったのであろう。

徳永春夫氏の『徳永家の歴史』によると、右馬七の教養の一端に禅学があったという。熊本に勤務していた若い時より坪井の見性寺(臨済宗)に通って座禅をしていたらしい。もし見性寺に熱心に通っていたならば、五高に勤務していた^{*43} 黒本植^{しよく}・^{*44} 浅井栄熙^{えいき}・菅虎雄・夏目漱石という見性寺の禅仲間と交流があったかもしれない。しかし今のところ、漱石と右馬七とが禅の道でつながりがあったという物的証拠は何もない。老年になっても『碧巖録講話』などを座右に備え、時には石貫村の広福寺の佐藤宗俊と禅書の会読もし

たらしい。

徳永右馬七は若くして夏目漱石に親しみ、俳句や英語について師事した。特に熊本にあっては俳句を通じて添削を受けたり、漱石を介して子規の評点をもらった。しかし、元来、名利に与かろうとする者ではなかった。小事に拘泥しない放胆な正格だった右馬七は、ロンドン留学以後、大学教師・小説家に転じた漱石に強いて交わりを求めず、夏目家とは全く無音に過ごした。右馬七は息子たちにも漱石のことを少しも語らなかった。恬淡^{てんたん}たる性向のなせるわざであったのであろう。

-
- *1 徳永家のことについては徳永春夫著『肥後国玉名郡石貫村 徳永家の歴史』（私家版、1992年12月）に全面的に依っている。
 - *2 『徳永家の歴史』第5章 第1節 3
 - *3 (1863～1936) 法学博士。シカゴ大学、コロンビア大学講師。雄弁家。
 - *4 (1857～1904) 久留米出身。評論家。化学専攻。東京大学助教。後に高等師範学校教授。
 - *5 (1858～1912) 国文学者。新潟県生。皇典講究所卒。高等師範学校、早稲田大学、学習院女子部教授。主著『万葉集詳解』
 - *6 (1864～1900) 操山。哲学者。帝国大学文科大学卒。東京専門学校で哲学を講じ、東京高等師範学校講師。ドイツ留学、京都帝国大学講師。文学博士。
 - *7 (1867～1901) 哲学者。帝国大学文科大学卒。学習院教授。ドイツ留学帰途死去。拙稿「夏目漱石の学習院就職運動 一新資料・立花銑三郎あて漱石書簡の紹介」（『語文研究』第49号、1980年6月）、『喪章を着けた千円札の漱石』第2章「夏目漱石の学習院就職運動」参照のこと。
 - *8 坪内逍遙。
 - *9 (1868～1931) 大塚家に養子。楠緒子と結婚。美学者。帝国大学文科大学卒。東京専門学校で美学を教える。独・仏・伊留学。東大教授。
 - *10 (1830～1919) 号は中洲。漢学者。二松学舎を設立。東京高等師範学校教授、帝国大学古典科教授、文学博士。宮中顧問官。
 - *11 (1835～1910) 号は恕軒。漢学者。鳥取藩士。帝国大学講師。三重県中学校、和歌山県中学校で教える。
 - *12 (1860～1932) 国文学者。東京大学古典科卒。学習院、女子高等師範学校教授。文学博士。宮内省御用掛。帝国学士院会員。
 - *13 (1864～1943) ドイツ語学者。久留米出身。帝国大学独文科卒。第五高等学校、第三高等学校、第一高等学校教授。拙著『夏目漱石と菅虎雄 一布衣禅情を楽しむ心友一』（教育出版センター、1983年12月）参照のこと。
 - *14 山崎貞士「漱石異聞 一徳永朧枝との出逢ひ(3)一」（『松』1991年9月）によると、佐藤忠恕(1902年卒)は「坪井分教場の思ひ出」（熊本県立済々黌高等学校『多士』復刊第2号 1957年3月）の中で、「学級担任の温厚な徳永右馬七先生」と書いている。
 - *15 夏目漱石「ミルトン雑話」（談話。1908年12月1日『英語青年』）によると、「私は

嘗て早稲田大学で、Milton の Areopagitica を専任教師から受継いで教へた事があつたが、何うも解らなかつた。」とある。(岩波書店『漱石全集』第 25 卷「別冊 上」1996 年 5 月 15 日)

- *16 夏目漱石「僕の昔」(談話。1907 年 2 月 1 日『趣味』)によると、「丁度大学の 3 年の時だつたか、今の早稲田大学、昔の東京専門学校へ英語の教師にいつて、ミルトンの『アレオパジチカ』といふ六ヶ敷本を教へさゝられて、大変困つたことがあつた。」とある。
- *17 「綱島梁川日記」(1892 年 5 月 4 日)によると、「この日初めて余等クラスのピーカーの講師は文科大学の 3 年生と云ふなる夏目某と云へる人なるよしを聞きぬ。多分この金曜日より講義あるべしとの噂なり。」とある。(『梁川全集』第 8 卷「日記録」春秋社、1923 年 1 月 5 日)
- *18 (1858 ~ 1943) 近世文学研究者。名古屋生。大阪毎日新聞入社。『水谷不倒著作集』全 8 卷 (中央公論社)
- *19 (1868 ~ 1958) 国文学者。長野県福島町生。本姓は池谷。号は空外。1893 年東京専門学校文学科卒。訓詁を関根正直に学び、早大高等師範部国漢科を主宰し、1943 年退職。主著に『国文学書誌』『江戸文学史』などがある。
- *20 (1869 ~ 1915) 新劇俳優。熊本県生。川上音二郎一座、易風会、文芸協会、演劇無名会。「ハムレット」「人形の家」出演。
- *21 (1870 ~ 1937) 哲学・心理学者。長野県生。文学博士。早稲田大学文学部教授。坪内博士記念演劇博物館長。『金子博士選集』上・下巻、理想社、1938 ~ 40 年。
- *22 (1872 ~ 1936) 美術研究家。東京本所生。早稲田大学教授。日本美術学校長。
- *23 (1872 ~ 1945) 哲学者。福島県生。早稲田大学教授。
- *24 (1866 ~ 1938) 文芸評論家。小説家。秋田県生。『早稲田文学』記者。『新小説』編集主任。『秋田時事』新聞社長。主著『明治文壇回顧録』岡倉書房、1936 年 5 月。
- *25 (1871 ~ 1926) 教育学者。熊本生。早稲田大学教授。主著『人格的教育学の思』同文館、1914 年 2 月。
- *26 (1871 ~ 1918) 新劇指導者。評論家。島根県生。『早稲田文学』記者。早稲田大学教授。文芸協会演劇研究科指導講師。芸術座設立。その経営に尽力。女優松井須磨子との恋愛は有名。
- *27 (1871 ~ 1895) 俳人、劇作家。愛媛県生。正岡子規の従弟。ピストル自殺。『古白遺稿』(1897 年 5 月)は正岡子規編集兼発行である。漱石は「弔古白 御死にたか今少ししたら蓮の花」と悼む。
- *28 (1874 ~ 1947) 国文学者。文学博士。山形県米沢市生。『早稲田文学』記者。早稲田大学教授。文学部長。『五十嵐力集』全 6 卷、酒井雄文堂。
- *29 (1873 ~ 1907) 倫理学者、評論家。岡山県生。『早稲田文学』編集。若くしてキリスト教を受洗したが、途中から懐疑的になり、神秘的宗教体験を経て神の子の自覚を持つ。『梁川全集』全 10 卷、別巻 1、1921 年 12 月。
- *30 (1873 ~ 1948) 比較法制史学者。哲学博士。福島県二本松生。ダートマス大学を経てエール大学大学院卒。エール大学教授。
- *31 「大学卒業と同時に大学院に入りましたが、同窓漱石君の世話で、九月から直に今の

早稲田大学即ち当時の東京専門学校に毎週数時間出講することになりました。初めて教壇に立つたので、甚だあぶなつかしかつたが、どうやら排斥もされず、後には政治科と文科とを合併して、大教場で講義するようになりました(斎藤阿具「教職四十年の回顧」『一高同窓会報』第23号、1933年)

- *32 「綱島梁川日記」(1892年5月6日)では、「午後初めて新聘講師夏目氏のビーカーの講義を聞く。弁舌朗快ならず、講釈の仕方未だ巧みならずと雖も、循々として温和に綿密に述べらるゝ処やゝ大西氏に似たるどころありて、未だ全く^{まこそうよう}麻姑搔痒の快を与へざれども、又その不明の朝霧を散ずるの感あらしむ。兎に角可なり(ママ)の講師と評すべし」とある。また(同年同月11日)では「只だ夏目氏「ビーカー」の講義に一時間出校せるのみ。氏は前に云へる如く這般大西先生が特に専門校に吹薦せられたる大学生徒にして大学内にて余程好評あるよしなるが、果せるかな「ビーカー」の講義は勿論、余が該講義の了りし後にてラボック氏の著書中不審の点(而かも田原氏も曖昧に答へ大隈氏は解すること能はざりし不審)を尋ねしに別に躊躇もせず、いと平平然として意を解されしは誠に感服の至りなりき」と賞賛している。(同年同月13日)では、「この日夏目氏と帰途談話を共にし大いに得るところあり。将来余は氏の益を得ることあるとの希望を生ぜり。」とあり、(同年6月3日)では「この夜夏目氏を訪ひ十時ごろまで学術上色々なる談話をなし、余が前途の立身上有益なる談話を多く聞けり。」と裨益ひえきする所大なることを感動をもって記している。ただ漱石辞職勧告問題が起きた1892年12月の「梁川日記」は『梁川全集』第8巻「日記録」に収録されていない。
- *33 山崎貞士「漱石異聞 一徳永隴枝との出逢ひ(1)―」(『松』1巻 第7号 1991年7月1日)。後に『新熊本文学散歩』(熊本日新聞情報文化センター、1994年10月3日)に収録。
- *34 徳永春夫『徳永家の歴史』第5章 第2節 3
- *35 「17日……外出中菅虎雄来る 教育会図書館に至り後菅虎雄を其宿所大西眼科医院に訪ふ 病気にて上京せるを見舞はんとて也」(1897年7月17日「狩野亨吉日記」)
- *36 山崎貞士「漱石異聞 一徳永隴枝との出逢ひ(5)―」(『松』1991年11月)
- *37 徳永春夫『徳永家の歴史』294頁に複写されたものが掲載されている。
- *38 月3回発行の玉名地方新聞。1950(昭和25)年9月から55年10月の335号まで発行。縮刷版があるという。
- *39 安東真人については荒木精之「新発見の漱石の手紙」(『日本談義』1966年4月号)、「続・新発見の漱石の手紙」(『日本談義』1966年7月号)に詳しい。2編とも荒木精之『熊本雑記』(日本談義社、1967年6月1日)に再録された。夏目鏡子述、松岡讓筆録『漱石の思ひ出』「6 上京」にも出てくる人物で、漱石の二松学舎生徒のころの同級生である。
- *40 荒木精之「続・新発見の漱石の手紙」(『日本談義』1966年7月号)
- *41 徳永春夫『徳永家の歴史』5章 第2節 3
- *42 熊本の第五高等学校では毎年12月中旬、管内(第5大学区)の中学校長や各教科の代表者を集めて協議会を開催していた。その際、各中学校の教科教授細目と教科用書及教授進度表とを提出させている。それによって、各中学校使用教科書を知ることができる。1897年修猷館・明善校・伝習館のものは旧制五高(熊本大学保管)の資料

で調査することができた。拙著『喪章をつけた千円札の漱石』第4章「五高時代の漱石」参照のこと。

- *43 (1858 ~ 1936)漢学者。石川県生。稼^{かどう}堂と号す。重野安^{しげの}繹、小中村清^{きよのり}矩などに就き和漢文修業。第四高等学校、第五高等学校教授。『稼堂叢書』全24巻がある。北山正迪「漱石の『祝辞』について 一漱石と黒本植一」(『文学』岩波書店、1979年11月号)参照のこと。
- *44 (1859 ~ 1930)英語教師、熊本細川家の家扶。熊本市生。同人社英語学科卒。福井中学校、中学済々黌、第五高等学校を歴任。1896年4月から97年3月まで1年間、夏目漱石と同僚だった。拙稿「夏目漱石と浅井栄熙 一鏡子入水事件に関わった禅の人一」(『近代文学論集』第7号、日本近代文学会九州支部、1981年11月)、拙著『喪章を着けた千円札の漱石』第8章「夏目漱石と浅井栄熙」参照のこと。

(文責 山口範子)

※ 初出：『絃説』第IX号(絃説社 1994年1月6日)